

不登校傾向児童への解決志向アプローチでの支援

—できていることを見付けてコンプリメントするWOWWを取り入れた学級づくりを核として—

三豊市立上高野小学校
教諭 岡澤 麻里

1 はじめに

県の「令和6年度生徒指導上の諸課題の状況」によると、不登校児童数は年々増加傾向である。前任校においては、不登校傾向のある児童が在籍する学級の担任を務めた。学級には互いのことをよく理解し合い、友好的な関係を築いている児童が多く在籍している一方で、自分の気持ちを我慢しがちで遠慮する児童や他者と比較して不満を述べる児童、自分の非を認められない児童も見られた。学級全体として、認められた経験や自分の力を発揮できる場面の機会が少ないことが課題の1つであった。高学年で不登校傾向にあった児童は自尊感情が低く、学習面や体力面において周囲との差があった。学校に行きづらくなる理由は多様で複雑である。したがって、その原因を深く探るよりも、児童ができていることに着目し、自尊感情を高めることや教師との信頼関係を築くことが、登校に向けた支援につながると考えた。同時に、対象児童だけでなく、すべての児童が安心して登校でき、自分の居場所があると感じられるような学級づくりを重視する必要があると捉えた。そこで、カウンセリング技法「解決志向アプローチ」の考え方に基づく「WOWW (Working On What Works: うまくいっていることに取り組む)」を学級経営に取り入れた。

2 実践の内容・方法

(1) できていることを見付けてコンプリメント（称賛・承認）する取組

① 日常の行動に目を向ける

WOWWは、問題の原因を追究するより解決に焦点を当て、できていることや良いことだけを見付けてコンプリメントすることが要である。まずは、日常生活の中で児童ができていることや実践していることに着目した。「自分から挨拶」「足を床につけて座る」といった明確に確認できる行動から、より細かな点まで観察を重ねることで、一人ひとりが多様な「できていること」をもっていることに気付かされた。良い言動を見付けた際は即座にその事実を伝え、称賛するだけであったが、その繰り返しによって望ましい行動が徐々に増加した。児童は、自分が実際にしたことを伝えられるので、褒められたことに納得がしやすい。ただし、児童が「認められた」と感じられない場合や、人前で称賛されることに抵抗を示す場合には、伝え方や内容を工夫する必要がある。特に低学年児童に対しては、称賛されること自体を目的化させないように配慮し、児童自身が「自分のできていること」に気付き、継続して取り組めるよう支援することを重視した。

② 児童と教師が共に行う目標（ゴール）づくり

児童自身が課題を整理し、学級経営の柱となる学級目標および「なかよしめあて」（人権・同和教育の取組）を共に作成することで、めざす姿を明確にした。「なかよしめあて」に関しては、SKYMENUのポジショニング機能を活用し、一人

ひとりが考えを表現・交流できる機会を設け、学級全体での達成状況を毎月振り返った。



めあての振り返りを3段階で数値化し、その理由を入力する。



【長期目標を振り返る手立て】



学級全体の考えをまとめ、掲示する。

課題解決に向けては、短期目標も設定した。それらは、具体的かつ行動として表現可能で、児童が容易に達成できるものであり、達成した際は視覚化して積み重た。短期目標については、特に解決志向の三原則を大切にした。

解決志向 三原則

- ★ うまくいっているなら そのまま続けよう
- ★ 一度うまくいったことは 繰り返そう
- ★ うまくいかなかったら すぐやめてちがうことをやってみよう

引用：「WOWWアプローチ」校内研修資料

1学期には、学習規律の定着をめざした。目標達成の基準を「班全員ができる」とすることで、児童同士が声をかけ合い、協力し合う姿が見られた。児童が主体的に取り組めるゴールは残しつつ、効果が見られない場合には柔軟に見直し、変更を加えた。6年生になると、「学級全員」ができることを目標とした。達成が困難な場合でも、「〇人できた」「人数が増えた」といった肯定的な言葉で児童の行動をフィードバックし続けることで、実際の達成につながっていった。時には教師がゴールを提案することもあったが、最終的には児童同士が「全員、足が床についているよ」と互いに行動をコンプリメントし合う雰囲気が徐々に醸成された。班や学級で目標を達成した際には、お祝いの時間を設け、できたことを共に喜び合うことで、次への意欲を高めた。

このように、短期間で成功体験を繰り返すことで、自己有用感を高めたり、自信につながったりできるようにするとともに、どのような目標であっても、作成して終わりにせず、学級全体・班・個人と多様な視点で振り返りを行い、児童・教師双方が意識し続けられるように努めた。

③ 外部講師から教師へのコーチング

毎年、校内で外部講師（四国SFA研究会：解決志向アプローチに関する研究会）による研修を実施しており、教師がWOWWについて学ぶ機会がある。私も校内研修でWOWWと出合った。講師は定期的に授業を参観し、児童の「できていること」に着目して授業の最後に伝えた。教師は、その視点から学び、肯定的な学級づくりに生かしている。担任以外の大人が児童の教室での行動を承認することは、児童の笑顔につながるだけでなく、担任が児童の「できていることを見る視点」を広げた。参観後に講師が作成した観察リストは教員間で共有され、学校全体の取組の一体感を高めているほか、家庭にも配布することで、保護者への情報提供としても活用した。

(2) 不登校傾向児童への個に応じた支援

はじめに述べたように、学校に行きづらく理由は多様で複雑である。だからこそ原因から解決を導くのではなく、WOWWの考え方に基づき、児童のもっている力から支援について考えた。

① 高学年A児の場合

A児は、登校した際は教室で過ごし、友人関係も良好であった。教室での様子を観察してみると、当番の仕事を忘れずにできており、責任感があった。また、本人や保護者とのやり取りから、好きなことに熱中でき、探究心が強いことが分かった。それから、本人や友人からの話から、A児が関心をもっていることを知るように心がけ、それを授業の中で生かしたり、学級や学校での活躍の場を意図的に設けたりした。

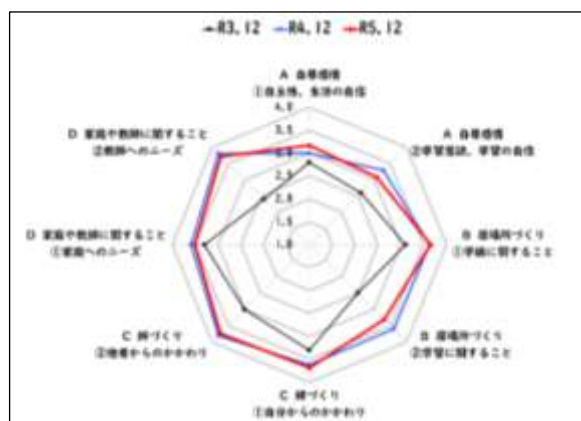
② 低学年B児の場合

B児の前年度の欠席日数は50日を超えていたが、友人関係は良好であり、コミュニケーション力も高かった。挨拶や質問をするなど自分から他者と関わることができ、遊びの中心となっている場面も見られた。B児の質問に一つひとつ丁寧に対応し、不安を解消しながら、教師に頼らずとも学級内で役割を果たせるように支援した。登校に関することについては、本人ができていたとしてもあえて言葉にして伝えることは控えた。

担任をしていると、学校に来て欲しい、教室で過ごして欲しいなどと思うことがあるが、それらをゴールにするのではなく、児童の行動や心に向き合い、うまくいっていることやできていることを認めることを肝に据えた。

3 実践の成果

WOWWを学級経営に取り入れることで、学級全体にも不登校傾向児童にもよい変化が見られた。令和5年度全国学力・学習状況調査の質問項目「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」に関しては、肯定的割合が100%（県+11.2）となった。また、下記のグラフは、県の「今の自分を見つめてみよう」を活用した調査結果である。どの項目においても同様の改善が見られたが、特に



【学級全体のアンケート結果の変遷】

持ちで何でも挑戦している」の項目に「いいえ」と答えていたが、少しずつ肯定的回答に変わり、卒業間近には「はい」と答えるようになった。委員会の委員長として運動会で指揮を務めたり、ピアノの演奏が全校生からの拍手喝采を受けたりするなど、多くの人から認められる経験を重ねる中で、自信をもつようになっていったことが

「B②学習に関すること」や「D②教師へのニーズ」に関して、大きな変容があった。

A児のアンケート調査を見ると、令和3年度はどの項目も低い傾向が見られ、「A①自主性、生活の自信」の低さが顕著に表れていた。しかし、令和5年度にかけて、高まっていった。

A児は、担任した1年目の欠席日数は20日を超えていたが、2年目には5日以下となり、大幅に減少した。出会った当初は、「私は『やればできる』という気

分かる。テストでの無回答もなくなり、学習にも前向きに取り組む姿が見られるようになるなど、学習意欲の向上にもつながった。

B児のアンケート調査を見ると、「学校に行きたくないことがあるか」「クラスの人からすごいと言われることがあるか」などの項目について、6月は迷いのある肯定だったが、11月には、すべてが明確に肯定へと変容した。

B児は、欠席日数が20日以下に減少し、保健室で過ごす日はなくなった。欠席の半数以上は1学期に集中しており、2学期以降は欠席や遅刻が減少した。苦手なことにも挑戦し、係活動を工夫するなど、学級のためによいと思ったことを教師に確認しなくても進んで行う姿が見られた。

4 普及させたい取組と期待される効果

大人の基準で褒めるのではなく、児童の行動や、心の心情に向き合い、それをコンプリメントしようとする意識を教師が児童一人ひとりにもつことである。ただシンプルに、日常生活の中でできていることを見付け、伝え続ける。不登校傾向がある児童においては、好きなことがあることや自己決定ができること、周りとの関わりの中でできていることに特に目を向けることで、居場所づくりの手がかりとなると考えた。特別に難しい取組ではないが、こうした関わりが、不登校傾向にある児童だけでなく、どの児童も安心して登校できることにつながっていくのではないだろうか。

5 課題及び今後の取組の方向

WOWWの実践は、うまくいっていることを見付けて承認する土台に、ルールや規律が学級の中で守られていること、守ろうとする雰囲気根付いていることでより効果を発揮した。本年度の実践より、教師の緩急がある関わりが大切だと改めて感じた。今後の取組の方向性として、3点挙げる。

1点目は、自尊感情の高まり、生活への自信が一時的なものではなく持続できるようにすることである。そのために、WOWWの実践で得た児童の言動を見る視点を生かし、安心して過ごせる環境をつくるとともに、将来につながる目標にも耳を傾け、達成を可視化できるようにしたい。

2点目は、周囲との人間関係に不安がある場合や、登校する日が非常に少ない場合などにおいて、解決志向でどのような個に応じた支援ができるかを検討することである。その場合は、学校と家庭だけでなく、様々な人や関係機関と連携しながら支援をしていきたい。

3点目は、学校全体での取り組み方である。各教室の中だけでなく、全校生を1つの集団と見て、学校行事や集会において教職員一人ひとりがWOWWの視点をもって児童に関われば、さらに効果が出るだろうと思う。

これからの教員生活においても、児童がもっている力を生かすためにできていることに目を向けてコンプリメントし、児童が安心して過ごせる場所を増やすことに努める。

【参考文献】

- ・インスー・キム・バーク著、ソリューション・ワーカーズ訳『教室での解決うまくいっていることを見つけよう！』、ソリューション・ワークス、2005年
- ・諸富祥彦編著『カウンセリング・テクニックで高める「教師力」』第5巻、ぎょうせい、2011年

【参考・引用文献】

- ・大西恵子著「WOWWアプローチ」校内研修資料